

2004年10月16日(土) 13:00～

名古屋工業大学 51号館101大教室

フォーラム参加費 一般：3,000円/学生：2,000円

## 第1部 見えない世界との出会い 基調公演 (1)



講師：内田 繁 氏

### 第1部 講師：内田 繁

- ① 近代社会の問題
- ② アンドレア・ブランジ氏のウィークモダニティー
- ③ 根元的問題は日本文化

#### ○見えない世界はかつて当たり前にあった。

近代に入って実証主義が台頭し科学で証明できるものを中心になった。デザイナーは口には出さないが、見えない世界の仕事をしている。

- ・ 共同社会 (ムラ) → 周囲に溝を掘り水で埋め、結界を作って聖なる世界を作った。鋤・鍬はその溝を作るためのものであった。
- ・ 平和的領域＝安心できる世界を作る。(精神的にも)

見えないもの(死・悪霊など)を避けることが大事だった。

産業革命以降科学技術がもてはやされ、自然と人間の関係も変化し始めた。消費も大きくなり、自然と人間のバランスが崩れる。(私利私欲の限りなき追求→際限が無い)

#### ○近代はどのような時代だったのか？

ブルジョアジーの台頭で、身分制が無くなり多くの労働力が確保できた。そこに産業革命があった。日本の場合、産業革命は明治以降であり、世界的にも遅れてはいない。日露戦争の貴台は世界と肩を並べて発言することができた。それ以前は不平等条約があり、なかなか世界に追いついていなかった。更に日本はその不平等から開放されたが、同じ関係をアジアに広げてしまった。

- ・ 産業化 - 都市化
- ・ 資本主義
- ・ 近代化
- ・ 国民国家
- 生産・流通の支配
- 植民地支配・植民地からの原料供給
- 帝国主義・軍力で抑圧

近代化は西洋人のためのものであった。だから日本は西洋をモデルにした。現在のイラク・イランなど西洋の近代化に対して不満を持っている。自分たちのための近代化があつてしかるべき。日本はペリー来航で県下に強い国になろうとした。 → 殖産興業近代化の波の中でわれわれは見えないものを失って行った。

#### ○万国博 (科学万能を矜持した)

1873年のウィーン万博に日本が初出品。日本文化を紹介して外貨を稼いだ。

1900年パリ万博(アールヌーボー)かつては哲学の一部であった科学が全てのものの規範になった。科学の細分化も問題(心理学etc.)。これを包括する科学が無い。その流れが現在までである。デザインはその全ての学問を結び付けるかもしれない。生活をまとめあげるのがさまざまな形になる(絵画・建築・車etc.)デザインが学問の中軸になるという考えが大事。

芸術家も科学万能主義に異を唱えた。この人たちには見えない世界が見えていた。直感・経験等から社会に警鐘を鳴らした。ヒューマンイズムを掲げる西洋が、反ヒューマンイズムの植民地支配は矛盾である。と西洋から逃げだした芸術家は多い。

(ゴーギャン・ボードレールなど)

#### ○力、速度、動き、標準化、大量生産、軽量化、組織化、制度画一性、規則正しさ

人はもっとファジーで弱く、合理的には生きられない。 → ウィークモダニティー近代は強すぎたのではないか？ウィークモダニティーという切り口で考えられないか？

弱さとは何か？ c f. 「フラジリティー」松岡正剛氏

近代では排除されたものばかり。その中にこそ大変な美しさ、わくわく感、芸術の中心概念があった。